時 評

新しいミレニアムの幕開け

—魅力・活力ある化繊産業を目指して—

山 本 一 元

日本経済は長い低迷期をようやく脱しかけた感があり、景気回復の機運が伺えるものの、繊維産業においては、アジア地域における需給バランスの失調、原料コスト高、個人消費の長期低迷などの要因に加え、輸入製品の急増などにより、混迷の度合いを深めている。こうした情勢にあって、日本の繊維産業は21世紀に向け、国際競争力を高めるための新たな産業基盤を築くために、構造改革を推進している。本年度の化繊協会での重要検討課題は、①国際市場構造の変化への対応、②国際競争力の強化への取組み、③急増する繊維製品輸入問題への対応、などである。また、一方、継続課題として、技術関係では、①「国家産業技術戦略—繊維産業」のフォローアップ、②人材育成問題への対応、③リサイクル問題への対応、などがある。

国際競争力の強化への取組み

情報技術(IT)が進展する中で、各社が構築・導入するERP(エンタープライズ・リソース・プランニング=企業資源計画)、SCM(サプライ・チェーン・マネジメント)、E-コマース(電子商取引)などについて情報交換し、競争力強化につなげていく。

「国家産業技術戦略—繊維産業」のフォローアップ

昨年度通産省にてまとめられた国家産業技術戦略では、来る21世紀における社会的要請・制約に対応して開発すべき繊維技術開発課題を列挙しているが、同技術課題の

現状把握を行う。すなわち、日本の大学および国・地方自治体の研究所・試験場などが保有している技術シーズ(特許など)を整理し、技術マップを作成するもので、本事業は、繊維学会の協力を得て進める。

人材育成事業

一昨年12月にスタートしたJTC推進協議会の場を通じて繊維工学系人材育成に取り組んでいる。今年4月からは同協議会として、東京農工大学に繊維系寄附講座を開設したが、さらに繊維学会とも連携を取り、技術者国際資格相互承認制度(APEC相互承認制度)などの検討を進める。

1990年代に入り、欧米の化学企業は企業再編化の動きの中で、化繊事業から撤退し、ライフサイエンス、バイオケミカルに特化しつつあり、今や繊維はアジアの時代と言われている。日本の化繊企業が、アジア諸国との競争力を高め、生き残りをはかるためには、現在優位にある総合技術力を維持発展させ、高機能素材などを活用した新規需要開拓をはかることが重要である。このためには、産官学連携により基礎研究は大学や国に委ね、効率的な研究体制を構築すること、さらには研究開発のインフラ機能を高め、国内外の大学・研究機関や研究者との連携・交流を密にし自由に議論できる関係を作ることが必要である。この意味から、今後の学会活動に大いに期待している。活力があり、魅力ある化繊産業を構築すれば、これが人材育成にも寄与するものと思われる。

Opening of New Millennium

著者紹介 KAZUMOTO YAMAMOTO

Asahi Chemical Industry Co., Ltd.

旭化成工業株式会社 代表取締役社長 工学博士

著者は、2000年7月より日本化学繊維協会会長をつとめている。趣味は、読書、絵画鑑賞とのこと。

本稿では、繊維産業における問題点と、21世紀への展開における産官学連携の重要性について述べていただいた。